



# 日本基礎理学療法学会 News

Japanese Society of Physical Therapy Fundamentals



第 27 回日本基礎理学療法学会学術大会の準備委員

## 【目次】

|                                                   |       |
|---------------------------------------------------|-------|
| 日本基礎理学療法学会理事長挨拶                                   | 1-2   |
| 第 27 回日本基礎理学療法学術大会学会印象記                           | 3-6   |
| 第 28 回日本基礎理学療法学会学術大会のお知らせ                         | 7-9   |
| 基礎理学療学 第 7 回 若手研究者ネットワーク シンポジウム<br>(旧称：夏の学校)のお知らせ | 10-11 |
| 研究室紹介                                             | 12-14 |

2022 年度 (2023 年 3 月 31 日発行)

## 理事長挨拶

将来（2026 年度）を見据えた学会活動の必要性について

理事長 藤澤 宏幸



2021 年 4 月に本学会が法人化して 2 年が経過しようとしています。ご存じのように本会（Japanese Society of Physical Therapy Fundamentals, JPTF）は、任意団体であった日本基礎理学療法学会（Japanese Association of Physical Therapy Fundamentals, JPTF）を母体として、日本理学療法士協会に置かれていた学会（JSPTF）が統合され、一般社団法人として歩み始めたわけです。すでに、日本学術会議へ変更届を提出し、協力学術研究団体としての活動を継続しております。その意味で、本会の運営が法人化以前より自律的になされていたことは理解いただけたと思います。

さて、本会は（一社）日本理学療法学会連合（Japanese Society of Physical Therapy, JSPT）の法人会員としても活動しております。JSPT は 12 の法人学会と 8 つの研究会から構成され、2021 年度に設立されました。2023 年度には 8 研究のうち、3 研究会（日本がん・リンパ浮腫理学療法研究会、日本栄養・嚥下理学療法研究会、日本理学療法管理研究会）が法人学会化することが決まり、準備を進めているところです。したがって、次年度からは JSPT は 15 法人学会、5 研究会にて構成されることになります。また、日本物理療法研究会は（一社）日本物理療法学会と、日本筋骨格系徒手理学療法研究会は（一社）日本運動器徒手理学療法学会との連携を深め、2 つの学会は将来的に JSPT への加入も視野に入れ、より適切で強固な関係性の構築を模索しているところです。

そのような中、JSPT 自体は各学会・研究会が発展するための相互扶助的組織であり、2026 年度を目途に、その機能を最小化することで議論が進められています。ただし、理学療法の学問の体系化に関する統合事業、協会との窓口機能、共通する事務機能（経理、会員管理システム等）は基本的な機能として継続する予定になっております。一方、経済的な観点からすると、本会には収入の安定化、キャッシュフローを勘案した適切な正味財産の増加など、自立した運営に向けての計画が求められています。加えて、学会運営は会員の皆様によるボランティアベースの活動によりますが、事務局および学術局の機能を維持し、運営に関わる会員一人ひとりの負担を軽減させる努力も必要となります。次年度からは、自立的な運営を求められる 2026 年度を見据えた活動が必要になることを会員の皆様と共有したいと思います。

ところで、2023 年度は 3 年間続いたコロナ禍が終焉を迎える年になりそうです。政府は 2023 年 5 月 8 日に新型コロナウイルス感染症を感染法上の 5 類に位置付けることを決定しました。また、3 月からはマスクの着用推奨をやめ、個人の判断に委ねることも明らかにしました。コミュニケーション力が重要である理学療法の臨床および養成課程においても、大きな変化の年となります。このような世の中の大きな流れのなかで、昨年、第 27 回大阪大会「臨床における理学療法効果の科学的証明 ―基礎研究の臨床への還元―」が鈴木俊明大会長のもと 10 月 1～2 日にハイブリッド形式で開催され、久しぶりに会員の皆様と対

面で議論することができました（参加者 847 名）。また、第 6 回基礎理学療法学若手研究者ネットワークシンポジウム「データサイエンスに関するハンズオンセミナー 2022 年 7 月 23 日～24 日」が野島一平世話人代表のもと信州大学を会場に対面開催できました。さらに新しい取り組みとして、基礎理学療法学ワークショップが学術局教育部によって企画され、第 1 回「理学療法における超音波画像の活用」が 2022 年 12 月 4 日、第 2 回「学会版徒手筋力検査法」が 2023 年 2 月 12 日に開催されました。両ワークショップともに 100 名を超える参加者があり、関心の高さが示されました。多くの事業を通して、着実にアフターコロナの世界へシフトしていることを実感できた年でもあったわけです。

さて、2023 年度は第 28 回学術大会が「理学療法を切り開くテクノロジーとこころ」をテーマに浦川将大会長のもと広島で、第 7 回基礎理学療法学若手研究者ネットワークシンポジウムが仙台で開催されます。加えて、他学会との 3 つの合同委員会（表 1）が本格的に始動します。いずれにしましても、2023 年度はより活発に、そして 2026 年度の自立へ向けた取り組みを実行して参りますので、引き続き会員皆様のご協力をお願い致します。

表 1. 他学会との合同委員会の設置とその内容

| 委員会名                        | 協力関連学会・研究会                              |
|-----------------------------|-----------------------------------------|
| 理学療法と非侵襲的脳刺激に関する検討委員会       | 日本神経理学療法学会<br>日本物理療法研究会                 |
| 人体解剖学実習検討委員会                | 日本理学療法教育学会                              |
| 理学療法士の超音波画像診断装置の使用に関する検討委員会 | 日本運動器理学療法学会<br>日本スポーツ理学療法学会<br>日本物理療法学会 |

## 第 27 回日本基礎理学療法学会学術大会 学会印象記

関西医科大学リハビリテーション学部

助教 梅原潤

この度、2022 年 10 月 1 日（土）と 2 日（日）の 2 日間にわたって大阪国際会議場（グランキューブ大阪）で開催された第 27 回日本基礎理学療法学会学術大会に参加しました。本大会は関西医科大学の鈴木俊明先生が大会長を務められ、「臨床における理学療法効果の科学的証明－基礎研究の臨床への還元－」をテーマに掲げ、大会長基調講演、教育講演 9 演題、シンポジウム 9 セッションに加え、口述発表とポスター発表が企画されていました。ご講演はいずれも各分野の著名な先生方ばかりであり、口述・ポスター発表は構造・機能・情報学や身体運動学といった基礎分野から臨床への橋渡し研究や AI、ロボットリハビリテーションといった最新分野に渡っており、まさに本大会のテーマである基礎研究から臨床への還元を体現する基礎理学療法学会ならではの充実した内容でした。

本大会は新型コロナウイルス感染症の世界的大流行後としては初めてとなる 3 年ぶりの現地開催ということもあり、学会当日は期待と不安が入り混じりながら、少し不慣れになった学会参加の身支度を行い会場へ向かいました。学会会場は準備委員の方々のご尽力により徹底した感染対策が施されており、安心して参加することができ、不安な気持ちは一瞬で無くなりました。会場では久しぶりに生の研究発表を聴講し、オンラインでは感じられない研究者の熱量と臨場感を体感することができ、これこそが学会の醍醐味だということを再認識しました。また、会場では久しぶりに研究者仲間と再会し、オンラインによって少し疎遠になりかけていた繋がりも取り戻すことができ、改めて対面で開催される学会の重要性を知ることができました。

本大会で特に私の印象に残ったのは特別シンポジウム「若手研究者（U39）による最先端研究紹介」です。この企画は様々な分野で活躍する精鋭なる若手研究者がその分野の最先端研究を紹介する場であり、毎年、分子・細胞レベルからヒト・患者さんを対象とした研究まで実に多彩な発表が準備されています。今年は中西智也先生による「後天性下肢切断後に生じる同側神経ネットワーク再組織化：Multimodal MRI による検証」、平山健人先生による「麻痺上肢の使用頻度アップをめざすニューロモジュレーション法の紹介」、また、私の大学院時代の先輩にあたる中村雅俊先生による「フォームローラーはストレッチの代わりになるのか？」など、どの研究発表も実に興味深い内容ばかりでした。

私にとって基礎理学療法学会学術大会は特別な思い出があります。なぜなら、約 8 年前に大学院生として初めて学会発表を行ったのも基礎理学療法学会学術大会であり、それ以降、毎大会欠かさずことなく参加または演題発表をしています。本大会でも口述演題で発表させていただく機会を得ました。発表タイトルは「骨格筋 3 次元形状計測における 3 次元超音波イメージングの妥当性検証」であり、従来から使用されている超音波診断装置とモーションキャプチャシステムを組み合わせることで 3 次元的な超音波画像を撮像することが可能な超音波イメージングシステムを構築し、骨格筋の体積や形状を MRI と同等の精度で計測できることを示した研究です。後日談にはなりますが、大変有難いことに私の発表内容を評価していただき、本学会より優秀賞をいただくことができました。私にとって本大会は今後忘れることのない記念すべき大会となりました。

また、本大会では準備委員の立場としても関わらせていただきました。大会の数か月前から受付や会場の設営方法、当日の進行などを他の大学の先生方と協力しながら作り上げていくのは非常に貴重な経験となりました。改めまして、大会長の鈴木俊明先生をはじめ、副大会長の中野治郎先生、準備委員長の福本悠樹先生、そして本大会に関わってくださった皆様に心より御礼申し上げます。今後も機会があれば、大会参加者としてだけでなく、運営側としても基礎理学療法学会に貢献したいと思います。

最後になりますが、次回の第 28 回大会は 2023 年 12 月 2 日（土）と 3 日（日）に広島国際会議場で開催されます。大会長は広島大学の浦川将先生が務められ、学会テーマは「理学療法を切り開くテクノロジーとところの科学」です。既に公開されている特別講演だけでも、京都大学の伊佐先生、カリフォルニア工科大学の下條先生、筑波大学の山海先生などニューロサイエンスやコグニティブサイエンス、サイバニクス分野を代表される先生方の登壇が予定されており、非常に興味深い内容となっております。リハビリテーション分野の方々はもちろんのこと、様々な分野の方が参加され、より一層盛大な学会になることを祈念しております。



新型コロナウイルス感染拡大後初となる現地開催での学会の様子

## 第 27 回日本基礎理学療法学会学術大会 学会印象記

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 理学療法学分野  
 社会医療法人長崎記念病院 リハビリテーション部  
 中川 晃一

この度、2022 年 10 月 1 日（土）から 2 日（日）に開催された第 27 回日本基礎理学療法学会学術大会に参加いたしました。本学術大会では「臨床における理学療法効果の科学的証明 ～基礎研究の臨床への還元～」というテーマが掲げられ、これに沿った魅力的な講演やシンポジウムが数多く企画されていました。私自身も臨床において治療効果を多角的に分析し、そこから得られた新たな課題を解決するために基礎研究に取り組み、その成果を日々の診療に還元していくという一連のプロセスが理学療法士の使命であると感じており、前述のテーマで開催される本大会への参加を非常に楽しみにしておりました。また、新型コロナウイルス感染症の拡大によって過去二年の大会はオンラインのみでの開催でしたが、本大会では対面とオンラインのハイブリッド形式による開催となり、会場で参加している先生方と直接議論ができることに期待が膨らみました。

1 日目は、まず大会長である鈴木俊明先生（関西医療大学）の基調講演を拝聴し、これまで注力されてきた F 波を用いた痙縮の評価ならびに治療効果の判定について豊富な自験例を基にお話し頂きました。研究内容が素晴らしいことは勿論のこと、「理学療法における Science の構築が大切である」という先生の熱い想いに触れることができ、研究を進めていくための活力を頂いたように感じました。また、同日には「高齢者における異なる関節角度で測定した筋硬度と関節可動域との関連性—Strain Elastography を用いた検討—」という演題でポスター発表に臨みました。私は関節可動域制限の主要な原因となる骨格筋の伸張性低下を臨床で客観的に評価したいという願いからこの研究に着手し、これを実現できるよう超音波エラストグラフィを利用した新たな評価手法の開発を進めています。久しぶりの対面発表だったので多少の緊張を感じましたが、座長や聴講頂いた先生方と活発な議論を交わすことができました。特に、関節可動域の測定条件や手技の統一化に関する意見交換を行うことで、自身の研究の質をさらに高めていくための提言を頂くことができました。また、様々な研究や取り組みに触れ、直接意見を交わすことで今まで思い浮かぶことがなかった多くの疑問や意見を考える機会にもなりました。このような経験ができたことも対面での学会の醍醐味だと思っています。

そして、2 日目はシンポジウムや教育講演を中心に参加しました。その中で、シンポジウム 5 は「臨床における理学療法士の超音波画像装置の使用について」というテーマで企画され、自身の研究テーマのヒントとなる内容が数多く盛り込まれていました。各シンポジストの先生方は理学療法士が多く臨床場面で超音波画像装置を活用できるという可能性を示し、評価ツールの枠にとどまらず、バイオフィードバック療法にも応用できることなども述べられていました。加えて、江玉睦明先生（新潟医療福祉大学）からは 2021 年より日本基礎理学療法学会内に「理学療法士の超音波画像装置使用に関する検討小委員会」が発足し、「他関連法人学会とともに、超音波画像装置を適正に理学療法評価や研究に用いるための指針をまとめ、さらに理学療法士に対する教育方法の確立に繋げる」という目標のもとで活動が続けていることが紹介されました。理学療法士が超音波画像装置を適正に用いるために、どのようなシステ

ム設定に留意すべきか、どのような生体内の変化を評価できるのかといった課題に対して一定の指標が示されることは、理学療法効果の科学的証明を進めていくうえで非常に重要であると考えます。同じ領域の研究に携わる者として、このような活動にも貢献できるように自己研鑽に励んでいきたいと感じました。さらに、教育講演 7 では北地雄先生（総合東京病院）が「脳卒中と clinical outcomes – 臨床評価のスタンダードから一歩先まで –」というテーマで講演され、脳卒中を呈した対象者に対する様々な理学療法的評価の信頼性や妥当性、その評価結果の統合と解釈について分かりやすくお話し頂きました。講演を聴講し、脳卒中を呈する対象者の理学療法において各評価の適応と限界を理解したうえで適切な評価を選択し、正しい結果の解釈を行うことが治療効果の科学的証明のために重要である点を理解することができました。また、実際に先生がどのように評価の選択、解釈をなさっているのかのプロセスについて、私たちも活用可能なウェブサイトの紹介も交えてお話しいただき、非常に参考になりました。

本学術大会では会期終了後の約 1 か月間にオンデマンド配信期間が設けられており、対面参加が叶わなかった参加者にとっても学びの機会を確保して頂ける素晴らしい学会でした。また、私自身もオンデマンド配信を利用することで他会場のシンポジウムや教育講演、一般演題を視聴でき、期間中に何度も復習することで知識の整理や臨床への活用方法を考えることができました。このように会期中だけではなく、終了後も演者の熱意に触れることができる大変すばらしい学会に参加させて頂きました。これもひとえに大会長をお務めになった鈴木俊明先生をはじめ、副大会長の中野治郎先生、準備委員長の福本悠樹先生、そして、事前準備から当日運営、配信作業などに携わったすべての関係者の皆様のご尽力の賜物であると思っております。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

次回の第 28 回日本基礎理学療法学会学術大会は 2023 年 12 月 2 日（土）から 3 日（日）の 2 日間、広島国際会議場にて開催される予定です。そして、大会長は浦川将先生（広島大学）がお務めになり、テーマは「理学療法を切り開くテクノロジーとこころの科学」とのことです。来年も本学術大会にて先生方と議論できることを楽しみにしております。



12 階ホワイエにてポスター発表を行う様子

## 第 28 回日本基礎理学療法学会学術大会のお知らせ

第 28 回日本基礎理学療法学会学術大会

準備委員長 藤田直人

第 28 回日本基礎理学療法学会学術大会が 2023 年 12 月 2 日（土）から 2 日（日）の 2 日間、広島国際会議場（広島市中区中島町 1-5）にて、対面形式で開催予定です。

本学術大会のテーマを「理学療法を切り開くテクノロジーとこころの科学」としました。我々理学療法士をとりまくリハビリテーション領域やヘルス産業の領域に次々と新しいテクノロジーが導入され、日本が世界に誇るロボット・AI 技術の恩恵を受けるようになってきました。一方で、テクノロジーの進化とともに忘れてならないのは、ひとのこころです。ひとに寄り添うリハビリテーション医療である以上、どのような最新テクノロジーがもたらされようとも、ひとがどのように感じ何を思うかに目を向けなければ、夢ある未来に向かってともに歩むリハビリテーション医療本来の目的が達せられるはずがありません。このような変革の時代にあって、理学療法領域の科学的検証をすすめてきた本学会の役割こそ大きいといえます。

一般演題につきましては、本テーマに関係なく広く募集いたします。多くの若手の理学療法士の先生、中堅～ベテランの先生、他領域から参画してくださっている先生方、関連企業の方々等を交え、未来のリハビリテーション医療、理学療法について熱く語り合う会になることを願っています。

広島では、世界遺産厳島神社の 70 年ぶりとなる大規模改修工事が完了し、新鮮な朱色に塗られた大鳥居を見ることができます。会場となる広島国際会議場近くには世界遺産の原爆ドーム、原爆資料館もあります。多数の皆様のご来場を、こころよりお待ちしております！



## 大会企画

- 大会長基調講演

情動からみるリハビリテーション:テクノロジーとこころ

浦川 将先生 (広島大学)

- 特別講演

どのようにして可塑性を誘導するか?

伊佐正先生 (京都大学)

こころとからだ～「来歴」論の視点から

下條信輔先生 (カリフォルニア工科大学)

心身の機能を改善するサイバニクス医療健康イノベーション

山海嘉之先生 (筑波大学)

- シンポジウム

スポーツ科学を広島から(仮)

野村謙二郎先生 (広島大学)

\*その他のプログラムは調整中です

## 一般演題募集

採択演題数は、口述：100 題、ポスター：150 題の計 250 題程度を予定しており、理学療法に寄与する内容であれば、どなたでも演題を応募できます。随時、ホームページ (<https://28kiso-jspt.com>) にて情報を更新いたしますのでご確認ください。皆様のご参加と演題応募をお待ちしています。

演題募集期間（予定）：2023 年 6 月上旬～7 月下旬



(大会ホームページはこちらから)

## 第 7 回 基礎理学療法学 若手研究者ネットワークシンポジウム

## (旧称：夏の学校) 開催のお知らせ

東北文化学園大学医療福祉学部

鈴木 博人

COVID-19 に対する政府の見解が変わり、社会活動にも少しずつ変化を肌で感じるようになった今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。マスク着用についても「個人の判断」となりましたが、私の春は花粉症と共にあるため、もうしばらくはマスクを手放す訳にはいかなそうです。

さて、2023 年 8 月 26 日・27 日に宮城県仙台市で第 7 回 基礎理学療法学 若手研究者ネットワークシンポジウム（旧称：夏の学校）を開催いたします。2022 年度にオンサイトで開催された同企画や第 27 回学術大会では多くの皆様と再会することができ、大変心嬉しい時間でした。合宿形式での開催とまではいきませんが、この仙台の地で皆様と熱く議論できる時間にしたいと考えております。

当シンポジウムでは「研究領域間・研究者間の相互理解・コミュニティ形成」をテーマにした企画を準備しております。「基礎理学療法学 夏の学校」時代から引き継がれた「リラックスした雰囲気の中での議論」を体感できる時間を多く設定する予定です。

一日目は若手研究者講演とポスターセッションを予定しております。若手研究者講演は話題提供いただいた方から 18 題を選出させていただき口述で研究紹介いただく企画となっております。オンサイトでの実施は鹿児島で開催された第 4 回夏の学校以来になります。また、ポスターセッションについては 60 題ほどを予定しております。当シンポジウムはセミ・クローズドな会ですので、話題提供の内容も他学会発表済みのもの、研究計画中的もの、進行中の実験、これまでの研究成果のまとめなど、種類に指定はございません。「そこにポスターがあれば議論の花が咲く」、それが当企画の醍醐味だと感じております。ぜひご登録いただき、研究活動のスパイスを得てお帰りいただければと考えております。

二日目は、特別公演とシンポジウムで構成しております。まず、特別講演については東京都立大学の金子文成先生にご依頼させていただきました。金子先生には橋渡し研究をテーマにその定義や概要、実践方法等についてご講義いただく予定です。第 25 回の学術大会より発表領域に「基礎から臨床への橋渡し研究」が追加となりました。一方で、私自身の不勉強もありますが、基礎理学療法における橋渡し研究とは何を指すのか、自身が一研究者として橋渡し研究に参画できる可能性はあるのか、その方法にはどのようなものがあるのかなど、曖昧な点が多数ございます。これを機に皆様と橋渡し研究について学び、共通認識を持てればと考えます。また、「基礎 ↔ 臨床～実践者の声～」と題したシンポジウムも予定しております。当学術大会の発表者を拝見しておりますと、大学院等で基礎研究を学んだのち、臨床現場で勤務する方が年々増えていると感じております。そのような皆様は、その後どのように継続されているのでしょうか。この度、臨床現場で勤務しながら基礎研究を行われている 3 名の実践者の方にシンポジストご依頼しております。講師の皆様からテクニカルな点も含めてリアルな声をお聞きできればと思います。

ぜひ仙台にお越しいただき、身体知を伴った研究者同士のリアルなクロストークを体験いただきたいと考えております。そして、当シンポジウムが皆様の研究活動の一助になることを願っております。

主催

一般社団法人  
日本基礎理学療法学会  
JPTF Japanese Society of Physical Therapy Fundamentals



# 第7回若手研究者ネットワーク シンポジウム

@仙台

|                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><b>日時</b> 2023年 8月26日-27日</p> <p><b>申込</b> 2023年 4月中旬(予定)</p> <p><b>会場</b> 東北文化学園大学<br/>対面開催 (一部オンライン配信)</p> <p><b>代表</b> 鈴木 博人<br/>ー東北文化学園大学</p> | <p><b>プログラム (予定)</b></p> <p><b>特別講演</b><br/>講師 金子文成 先生<br/>ー 東京都立大学<br/>橋渡し研究をテーマにご講演いただきます。<br/>橋渡し研究について基礎から学んでみませんか?</p> <p><b>シンポジウム</b><br/>基礎⇄臨床～実践者の声～</p> <p><b>若手研究者講演 (18題)</b></p> <p><b>ポスター発表 (60題)</b></p> <p>※企画の最新情報は当学会HPより発信いたします。</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

<事務局>  
東北文化学園大学3220研究室内 (〒981-8551 宮城県仙台市青葉区国見六丁目4 5 番1号)  
鈴木博人・我妻昂樹 (E-mail: jptf.wakate7th@gmail.com)

## <お問い合わせ>

東北文化学園大学 3220 研究室 (〒981-8551 宮城県仙台市青葉区国見六丁目4 5 番1号)  
鈴木博人・我妻昂樹 (E-mail: jptf.wakate7th@gmail.com)

## 研究室紹介

### 「局所解に陥らないために」

東京医科歯科大学大学院 歯科学総合研究科

運動器機能形態学講座

助教 井原 拓哉

E-mail: ibara.fana@tmd.ac.jp

この度、日本基礎理学療法学会 News で研究室紹介をする機会を頂戴いたしました、東京医科歯科大学の井原拓哉と申します。2024 年度に迫った東京医科歯科×東京工業大学の統合に先駆けてこのような機会を頂戴し、記録に残せることも何かの縁と捉え、私の自己紹介と現在の環境に関してご紹介させて頂ければと存じます。

私は広島大学にて学士・修士課程を修了したのち、大分県にある川島整形外科病院に就職し、主に整形外科疾患を有する患者さんの入院及び外来理学療法に約 10 年間従事させて頂きました。また、同病院で勤務しながら社会人院生として、同じく広島大学で博士課程に進学・修了した後、現職の東京医科歯科大学の運動器機能形態学講座の助教に入職いたしました。研究内容は主に整形外科疾患を有する患者さんの動作解析を中心に行ってききましたが、興味の幅が広く、それ故に研究内容も散乱している節があります。その中で主軸として持っている疑問として、「なぜ、そのように動くのか？」という疑問があります。整形外科分野では、理学療法の過程において、動作様式の詳細に問題を提起することも少なくないかと思います。私も臨床で患者さんと対峙している時に、なんで痛いのにそのように動くのだろうか？何かその動き方を行わなければならない理由があるのだろうか？もしかして別の目的を達成するために、実は理にかなった動作様式である可能性はないだろうか？はたまた、身体機能による制限のため、そのようにしか動けないのか？などと、頭の中の迷路をさまよってきました。現在も、一意に決まる解は持たえず、人がそのように動く理由を知りたいという好奇心に突き動かされるまま、研究を続けています。

さて、研究室紹介として、以下に私の現在の環境に関して記させて頂きます。そもそも「医科歯科に理学療法の学科ってあったっけ？」と思われる方が大半ではないかと想像します。事実、東京医科歯科大学に理学療法士を養成する課程はありません。では、何をしているかと言いますと、企業が出資して研究を進める寄附講座に所属し、所属講座の医師、出資企業関係者と協働して行う共同研究に主に従事しています。また併せて、所属講座の上司に当たる医師の主導する解剖学や先端デバイスを用いた整形外科に関する研究、そして自らが主導する研究を並行して行っています。現環境に移って、ちょうど2年が経過しますが、一番痛感しているのは研究目的の重要さです。企業との共同研究は、社会実装を最終ゴールとし、利益を生み出す事も必要となります。一方、アカデミックな立場での研究は、社会的意義を重要視することになるかと思います。現在携わっている共同研究に加えて、所属講座の特徴として、解剖学で行うミクロな観察に基づく研究から、先端デバイスで捉えるマクロなスクリーニングに関する研究までと、携わることが出来る研究内容の幅も広大です。すべての研究の目的は社会還元ではありますが、どのように社会還元するかといった視点は多種多様で、様々な主旨を持った研究に携わることで、今まで持つ

ていた自分の視野が格段に広がったと感じています。そんな環境の中で、現在は理学療法の専門知をさらに深めるための研究と、専門知を一般社会に活かすための研究という 2 つの方向性を定めて、研究を進めています。前者には従来の動作解析装置の使用に加え、深度センサを始めとする他分野で利用されるセンサや解析手法の応用を、後者では主にスマートフォンに含有されるセンサと AI を用いた解析技術の融合を中心に、広く理学療法から社会へ還元することを目標に研究を進めております。どうしても臨床現場との距離が出来てしまう環境ではありますので、実際の現場の声に耳を傾け、目とともにセンサを傾けながら、本当に「役に立つ」研究を進めていければと思っております。情報過多で、何が本当かわからない昨今です。そんな中だからこそ、現場の生の声を大切にしていきたいと思います。見かけた際にはお気軽に声をかけて頂けると幸いです。また、上記のような研究にご興味がある方のご連絡もお待ちしております。



スマートフォンのセンサと AI 技術を融合することで、臨床現場で使える評価技術を研究しています。



深度センサを用いて測定した身体背面の点群データです。  
色情報（図左）でなく深度情報（図右）を用いて、身体表面の運動解析を行っています。

〔編集担当者より〕

今年度は井原拓哉先生に研究室紹介をご執筆いただきました。

次年度もリレー方式として、井原先生からご紹介いただき進めて行く予定です。

研究室紹介、その他、本ニュースに掲載希望あれば編集担当者までご連絡お待ちしております。

【JPTF 日本基礎理学療法学会 News 2022 年度 第 5 号】

2023 年 3 月発行

発行人：一般社団法人 日本基礎理学療法学会 理事長 藤澤 宏幸

発行所：JPTF 日本基礎理学療法学会

編集者：中村雅俊・本田祐一郎・中江秀幸

E-mail：public@kiso.jspt.or.jp